

## 呉国城址小考      遷都問題と城址の偏在性について

著者	江村 知朗
雑誌名	集刊東洋学
巻	112
ページ	1-21
発行年	2015-01-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00132741">http://hdl.handle.net/10097/00132741</a>

## 呉国城址小考

### ——遷都問題と城址の偏在性について——

江村 知朗

#### 序

筆者は先に、先秦時代の呉国の遷都問題に関する研究史を整理し、遷都の始点である初期の呉都と遷都経路について、これまでに有力視されてきた説を以下のように大別した。

- a、『史記』卷三十一・呉太伯世家（以下、呉世家と略す）正義に依拠して、無錫梅里を起点とする説。<sup>①</sup>
- b、陝西・江漢流域から次第に東遷してきたとする説。<sup>②</sup>
- c、大型墓葬の集中と宜侯矢簋の発見を根拠に、寧鎮地区を起点とする説。<sup>③</sup>

多くの見解はこれらのいずれかに該当するが、考古調査の進展しつつある現在では、c説が最も有力視されている。

るものと思われる。しかし、これに對して、

d、蘇北から南下したとする説。<sup>④</sup>

e、蘇南西方から東方に遷徙したとする説。<sup>⑤</sup>

といった異論も提出されており、いずれの説が妥当なのか、まだ決着がついたというわけではない。しかも、残念ながら、資料は万全というにはほど遠く、いくつかの城址の調査結果と地方志の記載を手掛かりにするしかない、というのが現状である。

しかし、このような状況においても多くの研究が発表され、当問題が呉国史・呉文化研究の重大な論点であり続けていることにはかわりがない。では、考古調査は日々進展しているとはいえ、資料状況が劇的に改善されたわけではないなかで、a～e説の論者たちはどういった城址を対象として如何なる根拠をもって、自説を展開してきたのだろうか。

実のところ、遷都問題を考えるうえでは、「城址」についての議論が十分になされてきたとはいえない。a・c説においては、どの城址が呉都であると明確に指摘しているとは限らず、各説のなかでも共通の認識があるわけではない。また、d説の始点となる蘇北地域からは、揚州市の邗城を除けば、呉都と推定されるような城址は発見されていない。e説では、どの城址が呉都であるか明確に指摘しているが、後述するように、その分析に関しては疑問に感じられるところがある。

これをふまえて、本稿では、都城探索の鍵であるところの城址そのものについて検討してみたい。とりあげる各城址に関しては、従来、様々な論文や書籍において言及されてきたが、遷都問題という視点からこれを見直し、所在地・年代・規模といった基本データを揃えて、呉国城址についての総合的な把握を試みたいと思う。また、各城址の分布状況には一定の偏りがみとれるのであるが、その偏りが如何なる意味をもっているのか、呉国の文化的環境とあわせて考察することによって明らかにしたいと思う。

## 一 呉国城址概要

### (一) 考察対象となる城址

既発見の城址を手掛かりとして遷都問題について考える際、b・d説は、その始点となる城址を特定することができないが、遷都経路に当たる城址としては、江蘇省常州市の淹城と、揚州市の邗城が挙げられる。これらを除くa・c・e説の対象地域は現在の江蘇省南部（蘇南）地域に包括される。つまり、蘇南地域に揚州市を加えた地域にある城址が、本稿の考察対象となる。

当地域の城址については、二〇〇八年に刊行された『中国文物地図集 江蘇分冊』<sup>7)</sup>（以下、『江蘇分冊』と略す）が最も網羅的にデータを収集しているが、そのなかで呉国に関係する城址は十二件ある。これらの城址には、発掘調査を経たものと未だ簡単な調査しかなされていないものがあり、データは必ずしも詳細ではなく、そのうえ個々の城址によって判明している事柄には差がある。しかし、都城探索という問題にしばってみた場合には、ここから一定の情報を出し得ると考える。

そこで、『江蘇分冊』をもとに、さらに『江蘇分冊』刊行以降の調査報告から城址一件（葛城遺址）を加えた<sup>8)</sup>、計十三件の城址について整理したのが、三頁の『江蘇分冊』

### 3 呉国城址小考（江村）

②	①	No.
南 城 址	固 城 址	城 址 名
南京市高淳县 溪鎮南村	南京市高淳县固 城鎮東新建村	所在地
春秋	春秋	年代
		子城規模
	東西二〇〇m・ 南北二二〇m	内城規模
周長六〇〇m	東西一〇〇〇m・ 南北八〇〇m	外城規模

『江蘇分冊』 呉国城址一覧表・附葛城遺址

呉国城址一覧表・附葛城遺址』（以下、「一覧表」と略す）である。一覧表の城址の順番は、『江蘇分冊』下冊の載録順に従い、最後に葛城遺址を加えている。整理した項目は、城址の位置・年代、及び城壁の規模（長さ・幅・高さ）である。

なお、『江蘇分冊』には、一覧表に挙げた以外にも「呉王避暑宮」（無錫市濱湖区馬山鎮万豊村内閭湾底）・「余城」（江陰市雲亭鎮花山村高家墩）・「広陵城」（揚州市区北蜀岡上）といった城址ないしは関連遺址が存在するが、呉王避暑宮は「城址」と言えるか不明であるうえ、さしたる情報もなく、余城は夏末から周初にかけての城址で、呉国との関係があるのか不明である。広陵城は、⑫邗城と同じ蜀岡に位置し、その規模は邗城よりやや大きい。また、最下層の文化堆積は春秋時代のものであるが、城壁はその後（唐代）の築城であると考えられる。これらの理由により、

⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③
遺址	城址	城址	城址	故城	遺址	城址	城址	城址	城址	遺址
葛城	邗城	武城	呉大	蘇州	呉城	平陵	留城	胥城	閭閻	淹城
丹陽市珥陵鎮祥里村南葛城組	揚州市西北蜀岡南沿	昆山市巴城鎮西北潭村	蘇州市吳中區胥口鎮・木瀆鎮一帶	蘇州市現老城区範圍	蘇州市虎丘區橫塘街道石湖西茶磨嶼	常州市溧陽市南渡鎮古城村	常州市武進區湖塘鎮河留村	常州市武進區湖塘鎮東華行政村東一五〇m	常州市武進區雪堰鎮東北城里行政村城里村	常州市武進區湖塘鎮西南大垧行政村区域内
春秋晚期	春秋	春秋（闔廬築城）	春秋	漢・清	春秋	春秋（B） 春秋（C）五三八	春秋	春秋	春秋（B） 春秋（C）五一四	春秋（二七〇年前）
東西二〇〇m・ 南北一五〇m		子城有り	西壁一〇〇〇m・ 東壁一〇〇〇m・ 南壁一二〇〇m・ 北壁一六〇〇m							周長四五七m
	東西一〇〇m・ 南北一四〇m	内城有り	西壁六〇〇m・ 東壁四〇〇m・ 南壁八〇〇m・ 北壁三〇〇m							m 周長一二五二
東西一四〇〇m・ 南北一六〇〇m	東西一四〇〇m・ 南北一六〇〇m	面積四〇〇〇〇〇	東西？三〇〇〇m・ 西壁四二〇〇m・ 東壁九〇〇m・ 磨盤山上（現存分）五〇〇m（至て現存分）	東西三三〇〇m・ 南北四三〇〇m	東西一〇〇〇m（北壁現存分）	一辺五〇〇m（残長二五〇m）	周長五〇〇m	東西八〇〇m・ 南北六〇〇m（現存分）	東西一三〇〇m・ 南北八〇〇〇m	m 周長二五八〇

上記三つについては取り上げないこととした。

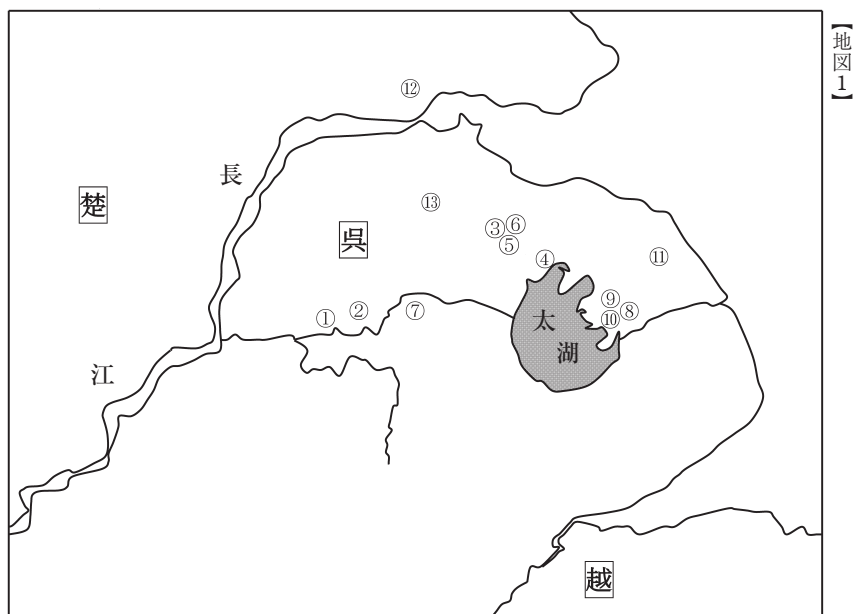
以下、一覧表の項目ごとに、各城址の概要について検討していく。

## (二) 所在地

一覧表の「所在地」から明らかのように、これまでに発見されている城址の分布には一定の偏りがみられ、特に常州市武進区湖塘鎮から無錫市濱湖区胡埭鎮にかけて、及び蘇州市に城址が集中している（【地図1】参照）。この偏在性は既に発見されている城址だけを対象に抽出されたものであるから、先秦時代当時の城址の偏在性そのものを示すわけではない。しかし、最後の呉都が置かれたとされている蘇州の重要性はいうに及ばないであろうし、常州市武進区の一帯も、城址の密集度は際立っている。従って、現在わかっている範囲でいえば、この二つの地点が、ある時点での蘇南地域における要地であったとみてよいであろう。また、①固城・②南城はともに高淳県に位置し、溧陽市にある⑦平陵城もこれとやや離れてはいるが、『江蘇分冊』は関連性があるものと考えている。

## (三) 年代

つづいて、一覧表の「年代」についてみると、ほと



などの城址が春秋時代のものであることがわかるが、春秋時代のいつ頃なのかまではわからないものもある。また、『江蘇分冊』が⑨蘇州故城を漢代以降の城址としているのは、⑩呉大城こそが呉王闔廬の築城したいわゆる「蘇州闔閭城」である、とする立場をとっているからである。⑨蘇州故城と⑩呉大城のいずれが闔閭城であるかは呉国史研究上の大問題であり、当然ここでも論じられるべきであるが、後述するような理由により、その是非については一先ず保留したい（九頁参照）。そのうえで、一覧表の城址を相対的な年代順に並べるならば、以下の表（『呉国城址年代』）のようになると推測される。

【呉国城址年代】

年代		城址
西周中期（春秋晚期）	⑬葛城	
春秋中晚期	①固城・②南城・⑦平陵城	
闔廬Ⅰ期（春秋晚期・蘇州遷都以前）	③淹城・④無錫闔閭城・⑤胥城 ⑥留城	
闔廬Ⅱ期（紀元前五十四年？）	⑨蘇州故城・⑩呉大城・⑪武城	
夫差期	⑧呉城・⑫邾城	

最も年代が古いのは⑬葛城である。この城址は二〇〇五

年に発見され、二〇一〇年に発掘簡報が公表された。<sup>⑪</sup>そのため、『江蘇分冊』には収録されていない。簡報によれば、

城壁は三度にわたって築かれており、始建年代は西周中期で、その後、西周晚期・春秋早期・春秋中晚期に改築されているという。

これに次いで古いのは、春秋中晚期の①固城・②南城・⑦平陵城の三城址である。①固城については『景定建康志』に「古固城、春秋時呉所築也。」とあり、『江蘇分冊』はこれに依拠している。この城址は、序に挙げたe説において呉王諸樊から餘昧までの都城とみなされている。張敏氏は「鳩茲（安徽省蕪湖県）↓固城（高淳県）↓葛城（丹陽市・春秋中晚期）↓無錫闔閭城（呉城）↓姑蘇（蘇州市南の木瀆鎮一帯・夫差の時）」という遷都経路を想定し、『春秋左氏伝』（以下、『左伝』と略す）昭公十三年「呉餘昧十五年（紀元前五二九年）にある、楚人が「固城を圍み」・「城いて之に居」したという記事と、『嘉靖高淳県志』卷之三所引「滕公廟記」の「楚靈王与呉戦、呉軍不利、遂陷此城、…宮殿烟焰、逾月不滅」という記事をもとに、①固城が呉都であったと論じている。<sup>⑫</sup>張氏の説に従うならば、『景定建康志』のいう固城築城は、呉世家正義や『世本』居篇に遷都の事績が伝えられている諸樊によってなされたということになる。<sup>⑬</sup>しかし、『左伝』の「固城」が高淳県の固城であり、『滕公廟記』の「宮殿」が呉都の宮殿であるとする張氏の解釈は、すでに別稿で論じた通り、疑問といわねばならない。<sup>⑭</sup>

従って、③固城の築城年代が諸樊の時であると断定することはできない。

また、『江蘇分冊』と張氏は、光緒『溧陽県志』の記載に基づいて、周景王七年（紀元前五三八年）に楚が呉を伐つて瀬（瀬渚邑＝固城）を滅ぼし、呉がその邑を陵平山に遷して陵平と名付け、十六年に楚が呉を破ってこれを取り、平陵と改名したとして、⑦平陵城を周景王七年の始建としている。張氏はさらに、『左伝』昭公四年の該当記事にある「滅賴」の「賴」を「瀬（瀬渚邑）」の誤りであるとしている<sup>(15)</sup>。しかし、『左伝』には「賴子」の降伏が記されており、「瀬」と「賴」を同一視するべきではない<sup>(16)</sup>。この「呉の瀬渚邑→陵平県→楚の平陵県」という変遷は前出の『滕公廟記』にも記されており、そういった伝承があったことは確かであろうが、ただし、『左伝』をもとに考えれば、周景王七年に滅んだのは「賴」であって「瀬」ではなく、「瀬」の陥落と陵平（後の平陵）の始建をこの年とすることは不可能となる。

以上のように、①固城・⑦平陵城を春秋中晩期の城址とする根拠は、はるか後代に編纂された地方志であり、その年代比定が正しいのか疑問である。しかし、本稿において、やはりこれらを春秋中晩期の城址と想定しておきたい。というのは、これらの城址が位置する一帯の地域は、呉王

寿夢以来、呉・楚境界の紛争地帯であり、『溧陽県志』や『滕公廟記』の記載するような状況は——記事が全て正しいかどうかは別としても——十分にあり得ただろうと推測されるからである。『左伝』襄公三年＝寿夢十六年（紀元前五七〇年）には、

三年春、楚子重伐呉、爲簡之師。克鳩茲、至于衡山。使鄧廖帥組甲三百、被練三千、以侵呉。呉人要而擊之、獲鄧廖。其能免者、組甲八十、被練三百而已。子重歸、既飲至三日、呉人伐楚、取郢。

とあり、これについて清・王琰『欽定春秋伝説彙纂』では、呉・楚の境界争いがこれより始まったという。この記事に登場する呉の「鳩茲」は、今の安徽省蕪湖市東南にあり、「鳩茲」から「衡山」を越えて①固城までは、直線距離にして約四十―五十kmである。つまり、①固城・②南城の城邑は、紛争の激化した諸樊・餘祭・餘昧期当時の状況下において、防衛機能を期待された可能性が高いのである。『左伝』からは⑦平陵城の始建年代・理由を知ることができないが、これが①固城・②南城の後背地域に位置することは、三城址の関連性を推測させる。こうした状況をふまえて、①固城・②南城・⑦平陵城をおおよそ同時代に比定し、同様の機能を期待された城址とみなしておく。

次に、闔廬Ⅰ・Ⅱ期という年代に区分した城址について



であるが、これらの全てが闔廬によって築城されたというわけではない。Ⅱ期の⑨蘇州故城・⑩呉大城・⑪武城は、闔廬が蘇州に遷都した後の城址であり、全て太湖東部の蘇州市から昆山市にかけての地域に位置する。それに対して、Ⅰ期の③淹城・④闔閭城・⑤胥城・⑥留城は、全て太湖北部の常州市武進区（＝無錫市濱湖区）に位置し、春秋晚期ないしは蘇州遷都以前の闔廬期に築城された可能性がある城址である。

③淹城の年代は、炭素十四年代測定によって二七〇〇年前とされており、これによるならば、春秋初期頃に築城されたということになる。また、内城河から発見された二つの独木舟は、一つは二八〇〇±一五〇年前、もう一つは二八七五±九〇年前のものであるという。仮に、これに従って始建年代を引き上げた場合、その年代は最も早くて二九六五年前頃となり、⑬葛城に匹敵する古さとなるが、独木舟と城壁の年代を同一視できるかどうかという問題がある。いずれにしても、その始建年代は当地域のなかでも一二を争う古さなのであるが、これを闔廬Ⅰ期に分類したのは、呉国城址としてみた場合の確実性を考慮したからである。『江蘇分冊』が依拠しているのは『文物』一九五九年第四期掲載の報告であるが、その後に行われた調査をふまえた研究では、③淹城の年代を春秋晚期に比定

する説や、西周期始建の後に春秋晚期に増築されたとする説が提示されている。<sup>19</sup> また、この城址の始建者が誰であるかには議論があり、必ずしも呉王によるものであると断定しきれない。<sup>20</sup> そこで、本稿においては、確実に呉国の城址としての建築（あるいは増築）といえる春秋晚期をその年代とし、闔廬Ⅰ期に分類しておく。

これに加えて、同じく常州市武進区にあつて③淹城と甚だ近くに位置し、関連性をもつ城址であると考えられている⑤胥城と⑥留城も、この時期に分類しておくこととする。⑥留城からは、③淹城と同様、春秋晚期の遺物が出土している。<sup>21</sup>

④闔閭城については、『江蘇分冊』は『光緒武進陽湖県志』に拠り、周敬王六年＝闔廬元年（紀元前五一四年）、闔廬が楚を伐つて帰還した際に築城し、⑤胥城もその際に、伍子胥が屯兵のために築城したものとしている。『江蘇分冊』の記載内容を史料と照らし合わせてみるに、その典拠は、『呉地記』佚文ではないかと思われるが、それによれば、

闔閭城、周敬王六年、伍員伐楚還、運潤州利湖土築之、不足、又取黃瀆土、爲大小二城。闔閭伐楚還、取以爲號。子城在無錫富安鄉、地名閭江。大城在陽湖界十六都八圖。

というように、周敬王六年に、楚を伐つて帰還した伍子胥



が築城し、闔廬が楚を伐つて帰還した際に、これを記念して「闔閭城」と名付けたという。しかし、この記事は不可解である。わざわざ遠く潤州（現在の鎮江）から土を運ばなければならぬ理由がなく、この伝承は信憑性に欠けるといわざるを得ない<sup>22</sup>。また、現行本『呉地記』にも、

闔閭城、周敬王六年、伍子胥築。大城周迴四十二里三十步。小城八里二百六十步。……闔門、亦號破楚門、吳伐楚、大軍從此門出。……

と記されているが、これが④闔閭城ではなく蘇州闔閭城（五頁上段）の築城を示していることは明らかである。現行本の闔閭城が蘇州闔閭城を指していると考えるのは、従来の常識的解釈であるとともに、ここに記される大城の規模と、④闔閭城の規模との間に格段の差があるからである<sup>23</sup>。この二つの伝承を見比べてみると、「周敬王六年に伍子胥が築城した」という点は佚文・現行本に共通しており、これらの伝承は、もともと同一の伝承であったと思われる。さらに、佚文では「闔閭が楚を伐つて帰還した」ことに因んで闔閭城と命名したといい、現行本では「楚を伐」った際に闔門＝破楚門から出陣したというが、ここに記される「伐楚」は、城名あるいは城門名の由来となるほどの重大な出来事であったはずであり、そうであるならば、それは『左伝』定公四年「闔廬九年（紀元前五〇六年）」に記される楚

郢都攻略（翌年帰還）を指すと考えるのが自然であろう。つまり、こうした共通点をもつこれらの伝承は、ある時点で佚文と現行本の伝承に分化したのであると推測されるのである。すると、周敬王六年＝闔廬元年（紀元前五〇四年）という築城年代を、無錫と蘇州のふたつの闔閭城に当てることができず、これがどちらの年代を指すかといえは、それは蘇州闔閭城にほかならないであろう。すなわち、佚文に基づいて④闔閭城の始建年代を決定することはできないのである。

ただ、これまでの考古調査によって判明している限りでいえば、④闔閭城の年代は春秋中期より遅く、東西二つの小城のうち西城の建築遺址と城壁の年代は春秋晩期のものであると推測されるという<sup>24</sup>。従って、闔廬元年の始建ではないとしても、闔廬期の城址の可能性はあるということになる。こうした事情をふまえ、蘇州市・昆山市所在城址と区別して、④闔閭城を「闔廬Ⅰ期（春秋晩期・蘇州遷都以前）」として分類しておく。

上記の四城址に対して、闔廬Ⅱ期（紀元前五一四年?）の⑨蘇州故城・⑩呉大城・⑪武城は、闔廬による蘇州遷都後の城址と考えられる。前述の通り、『江蘇分冊』は⑨蘇州故城を漢代始建としており、蘇州市呉中区胥口鎮・木瀆鎮一帯の⑩呉大城（靈岩古城）を「新呉王闔閭城」として

いる。

蘇州闔閭城の始建年代については、前出の『呉地記』（現行本）、あるいは『呉越春秋』闔閭内伝に依拠して、周敬王六年＝闔廬元年（紀元前五一四年）とする説が通行している。しかし、谷口満氏は、「国都城壁の始建といったエポックメーカー的な治績を闔廬のような著名人物に仮託するのは、先秦・秦漢伝承形成の際にみられる常套手段であって、実際の始建はもっと時代のさがる可能性がある」としている。ただし、『左伝』哀公十一年＝夫差十二年（紀元前四八四年）にみえる呉軍の将「胥門巢」の名から、夫差十二年以前に蘇州闔閭城の大城西門のひとつ「胥門」が既に実在したことが確認できるとして、始建年代を夫差の父である闔廬の時代とすることに關しては是としている<sup>25</sup>。つまり、蘇州闔閭城の始建年代は、闔廬の在位期間中（紀元前五一四～四九六年）であるが、元年であるかどうかは疑わしいということになる。前掲の年代表において、「（紀元前五一四年？）」とクエスチョンマークを附しているのは、こうした理由による。

では、考古学的にみた場合にはどうかというと、⑨蘇州故城城内から発見されている遺物は、春秋時代のものもあるとはいえ、漢代以降の遺物が圧倒的に多く、城壁の調査結果からも漢代以降の築城とみられている。一方、⑩呉大

城は、春秋時代の遺物が出土するとともに、「新呉王闔閭城」と称するに相応しい広大な範囲を囲む城壁が発見されているため、『江蘇分冊』に従ってこれを蘇州闔閭城とみなしたくなるが、その構造・布局については文献史料との対照を要するであろうし、考古調査のさらなる進展も期待される。そのため、この点については、本稿ではこれ以上の考察を行わず、⑨蘇州故城と⑩呉大城の両方をとりあげておく。

なお、⑪武城については、『越絶書』外伝記呉地伝に、「婁北武城、闔廬所以候外越也、去縣三十里。今爲郷也。」と伝えられており、『江蘇分冊』もこれに拠っている。

最後にとりあげるのは夫差時代の城址である。⑫邗城の始建年代は、『左伝』哀公九年＝夫差十年に、「秋、呉城邗、溝通江・淮。」とあることから、紀元前四八六年と考えられる。哀公十三年＝夫差十四年（紀元前四八二年）、夫差は黄池の会で牛耳を争っており、⑬邗城は北方進出への足掛かりであった。⑭呉城については、『呉郡圖經續記』に、

魚城、在呉縣西横山下、遺址尚存。蓋呉王控越之地、宜爲呉城。謂之魚城、誤也。横山之旁、岡勢如城郭状、今猶隱隱然。

とあり、越來溪をはさんで「越城」<sup>26</sup>と対峙する位置にある。「控越」は、呉の最晩期において継続した越との戦いに際

してのことであると思われるため、仮にこれに従うならば、⑧呉城の築城年代は紀元前四八二年から四七三年の間ということになる。

以上のようにみてくると、闔廬期の城址が最も多く、また、先にみた所在地と合わせて考えるならば、各年代で築城された地域に偏りがあることがわかる。すなわち、西周中期には太湖北部の丹陽市、春秋中晩期には太湖西部の南京市高淳県から溧陽市にかけての地域、闔廬Ⅰ期には太湖北部の常州市武进区（＝無錫市）、闔廬Ⅱ期には太湖東部の蘇州市・昆山市に、それぞれ地域が分かれている。夫差期の二つの城址が異なる地域に属するのは、北上の拠点形成と対越防御のためであり、これを例外とすると、各城址の年代と分布は密接な関連性をもつことが明らかである。

#### （四）規模

つづいて、城址の規模について考えてみたいと思うが、本稿では特に、外城の規模に限定して論じることにする。呉国遷都問題の解明という目的からいえば、都城であるか否かを判別するうえでは、宮殿遺址の存在と外城の規模が有用な材料となると考えられるからである。現在のところ、確実に宮殿址であるといえる遺跡を有する城址は見当たらず、従って、外城の規模こそが最も有用な材料になる。

ただし、前掲一覧表のデータは、一見してわかる通りに不揃いである。呉国城址には、子城・内城（小城）・外城（大城）の「三城三河」構造をもつ城址と、内城・外城の二重構造の城址があるが、三城ないし二城のデータが揃っていないものもあれば、そのうちの一城のデータだけしかわからないものもある。本稿の考察においては、外城の規模さえわかればよいのであるが、一城のデータしかない場合、それが外城のものなのか内城・子城のものなのか不明な城址もある。そうした城址のデータに関しては、一旦、外城の規模として整理し、本文中で個別に検証を加えることとする。なお、一城のみの城址のうち、⑬葛城については、東西二〇〇m×南北一五〇mと報告されており、これを外城とみなすときかなり小さい城址だったことになるが、発掘報告者は、所在地や遺跡、及び周辺の関連遺跡などをもとに、この城址が都城であった可能性を示唆している。すると、報告者はこれを小城ないしは子城と考えているはずであり、上記の数値を外城の規模に当てはめても意味がない。そこで、⑬葛城については当面、検討対象から除外しておくこととする。

規模の整理と比較を行うにあたっては、『江蘇分冊』に記されている東西・南北の距離（以下、「東西×南北」のかたちで記す）を基本としたが、『江蘇分冊』が距離では

なく面積や周長・城壁の辺長を記している場合には、それをそのまま用い、総合的に検討した。<sup>(27)</sup> 東西×南北の距離を基本とするのは、そのようなデータの記載方式が最も多いためであり、これをもとに計算しても精確な規模を得ることはできないであろう。しかし、ここではおおよその規模を把握することが目的であり、詳細な数値は必要としないため、大きな問題はないと考える。また、『江蘇分冊』以外の報告・論文等によつて修正を加えているため、数値は前掲の一覧表と異なるものもある。上記をふまえたうえで、外城の規模が大きいものから順番に整理してみると、以下の表（『外城規模』）のような結果になる（数値は概数）。

〔A〕は最大クラスの規模をもつ城址で、これらの規模は列国の国都の規模に該当する。『江蘇分冊』が記す⑩呉大城の城壁の長さは残存城壁のものであり、そこからは全体的な規模を知ることができない。備考にあげている鄆嶺・張照根両氏の論文によれば、四面城壁の長さはおおよそ、北壁四二八〇m・西壁三六五〇m・南壁五一〇〇m・東壁五六五〇mであるといい、これは先秦都城のなかでも有数の巨大城址ということになる。この城址は、太湖東岸の山麓をめぐる不規則な形状を成しており、東西×南北の距離も明示されていないため、表には東西・南北それぞれの最大の城壁を提示した。⑨蘇州故城は、⑩呉大城よりは小さ

く、東西三三〇〇m×南北四三〇〇mであるが、それでも列国の都城と同等以上の規模である。<sup>(28)</sup>

これらの次に規模が大きいグループは、〔B〕④闔閭城

【外城規模】

分類 記号		城址	東西×南北 (あるいは周長・面積)	備考
A		⑩呉大城	五一〇〇m×五六五〇m(形状が極めて複雑であるため、最長の城壁の長さによる)	鄆嶺・張照根「試論春秋時期呉国都城的規劃理念」(『規劃師』二〇〇三年第六期)参照。
		⑨蘇州故城	三三〇〇m×四三〇〇m	
B		④閭閻城	二二〇〇m×一四〇〇m	注(24) 所引張敏論文参照。
		⑫邗城	一四〇〇m×一六〇〇m	
		⑧呉城	一〇〇〇m(北壁残存分)	
C		③淹城	八五〇m×七五〇m/周長二五八〇m	
		①固城	一〇〇〇m?×六〇〇m	『江蘇分冊』では一〇〇〇m×八〇〇mとするが、注(18) 所引濮陽康京論文では一四五〇m×六〇〇mとしたうえで、子城より東側は漢代の遺址であるとす。上記の数値は、濮陽論文をもとに推定した春秋呉国城址としての規模である。
D		⑪武城	面積四〇〇〇〇〇m <sup>2</sup>	
		⑦平陵城	五〇〇〇m×五〇〇〇m(残長二五〇m)	
E		②南城	周長六〇〇m	
		⑥留城	周長五〇〇m	
		⑤胥城	八〇m×六〇m	

※⑬葛城を除く。

と⑫邗城で、④闔閭城は東西二一〇〇m×南北一四〇〇m、⑫邗城は東西一四〇〇m×南北一六〇〇mである。④闔閭城の規模は、楚の別都と考えられている鄢城の東壁二〇〇〇m・西壁一八四〇m・南壁一五〇〇m・北壁一〇八〇mという規模に比肩する。<sup>29</sup>しかし、「A」の城址とは顕著な差があり、都城と考えるには小さい。先にみた年代を参照すると、「A」は闔廬Ⅱ期・「B」は闔廬Ⅰ期と夫差期であるから、「A」が呉国都城の規模であるとすれば、近接した年代の城址でありながら明確な格差があることになる。

さらに、「B」と「C」の間の差も顕著である。⑧呉城は北壁しか残存していないため、実際の規模はわからないが、仮に一〇〇〇m四方の正方形として計算すると、面積は一百万㎡となる。東西×南北距離による単純計算で得られる面積でいえば、⑫邗城の面積は二百二十四万㎡となり、倍の差があることになる。もちろん、⑧呉城の南北の距離が不明であるから、実際にはもっと規模が大きいという可能性も否定できない。しかし、その可能性はあまり高くない、あるいはもっと小規模であったと考えてよいと思われる。この城址の位置は⑨蘇州故城や⑩呉大城に近接しており、そのような場所に、一〇〇〇m四方をはるかに超えて、「B」に並ぶほどの規模の城址を建造したとは考えにくい

からである。

つづいて、同じく「C」とした③淹城は八五〇m×七五〇mで、楕円形を呈する城址の周長は二五八〇m、護城河を含む面積は六十五万㎡である。①固城については、前掲表の備考に記したように、一〇〇〇m?×六〇〇mとする。濮陽康京氏によれば、外城の規模は一四五〇m×六〇〇mであるが、春秋時代の遺物は全て子城（一覧表の「内城」）の西側からのみ発見されており、東側の外城壁は漢代に築かれたものであるという。<sup>30</sup>そこで、城址全体の中ほどに位置している子城の東壁から外城東壁までの間を除いた範囲を春秋呉国城址とみなすと、子城及びその西側の外城部分は全体の約三分の二ほどであると思われるため、東西距離を約一〇〇〇mと仮定した。それをふまえて計算すると、春秋時代の①固城の面積は六十万㎡となり、③淹城とほぼ同じ面積をもつ城址であったと考えられる。

これらよりやや小さな城址として、「D」⑪武城と⑦平陵城がある。⑪武城の面積は四十万㎡で、東西・南北の距離や城壁の辺長はわからない。⑦平陵城は五〇〇m四方で、面積は二十五万㎡になる。

最後に、最も小規模な一群として、「E」②南城・⑥留城・⑤胥城がある。②南城・⑥留城の周長はそれぞれ六〇〇m・五〇〇mであり、距離ないし城壁の辺長は一〇〇m、



二〇〇mくらいになるであろうと推測される。⑤胥城に至っては八〇m×六〇mしかない。これらの城址に、その外側を圍繞する外城がなかったとは断定できないが、しかし、前述した通り、⑥留城・⑤胥城は「C」③淹城と、⑤胥城は「B」④闔閭城とも関連性を有する城址であると考えられており、これら比較的規模の大きな城址に従属した小城・要塞であつたと想像される。②南城も「C」①固城に従属する関係であつた可能性がある。そうであるならば、「E」の城壁はそのまま外城城壁とみなしても、不自然な規模ではないであろう。

さて、以上「A」「E」の城址のうち、これまでに都城である、ないしはその可能性があると論じられてきた城址は六件ある。それを上記の分類に従つて記せば、「A」⑩呉大城・⑨蘇州故城、「B」④闔閭城・⑫邗城、「C」③淹城・①固城となるが、ここには、呉都探索のうえで大きな問題が存するといわねばならない。「A」は列国都城クラスの規模をもつ城址であつたが、「B」の東西・南北の各距離はそれより一〇〇m以上短く、「C」の面積は「B」の半分以下しかない。このように、「A」・「B」・「C」の規模が明確に異なることについては既に指摘した通りであるが、すると、これまでの研究においては、城址の規模について重視されてこなかったことになるのである。

「A」については、⑩呉大城・⑨蘇州故城のどちらが蘇州闔閭城であつたとしても、都城に相応しい規模を誇っていることは一目瞭然である。これに対して、「B」の規模は「A」と顕著な差があり、しかもその築城年代は、闔廬I期と夫差期であるから、その格差の要因は年代に係るものとは考え難い。④闔閭城に関しては、その始建年代を古めにみつめて春秋中期頃まで遡らせたとしたならば、呉都の可能性も検討しなければならぬかもしれないが、今のところ、この城址を呉都と断じ得るだけの積極的根拠はない。この点、「C」①固城の年代は春秋中晩期とやや古く、その頃の都城の規模は、最盛期の闔廬・夫差時代の都城よりも小さかつたであろうから、年代による規模の格差という説明も成り立たないことはない。③淹城も、呉国城址としての確実な年代は闔廬I期であるとはいえず、始建年代は西周期まで遡る可能性があり、呉国の城址となつた年代も闔廬I期より早い可能性があるから、①固城と同様であるといえる。しかし、③淹城の性格については、呉都説のほか、奄族の都城・季札の邑・越の虜囚の居所・軍事施設など、実に様々な案が提出されている<sup>21</sup>。よく知られているように、この城址は極めて特殊な形状をもち、そのうえ宮殿遺址も発見されていない。従つて、呉都であつたと考えられ、これらの説を検討した方が適当であろうと思われる。

①固城についても、『左伝』の記す春秋時期の状況からみて、都城と考えることは困難であろう。この城址のある地域は呉・楚境界の激戦区で（六頁参照）、そのうえ『左伝』には、ここに呉都があったとみなせる記載はないのである。

以上のように城址の規模を整理してみると、呉都であったと推断し得る城址は、現在のところ、〔A〕に属する⑩呉大城と⑨蘇州故城の二城址だけになる。これらのいずれかが該当するとされる蘇州闔閭城の年代は闔廬Ⅱ期であり、最後の呉都である。いわば誰もが知っている呉都であるから、遷都経路を明らかにする呉都の発見にはつながらない。そうした意味でいえば、この結果は望ましいものであるとはいえないであろう。今後、上記の考察から除外した⑬葛城の調査が進展し、あるいはまた、新たな候補となる城址が発見されることが俟たれる。

## 二 城址の分布と文化圏

ここまで、呉国城址の所在地・年代・規模について、たいへん大まかにではあるが考察してきた。その結果、遷都経路の解明につながるような城址は——⑩呉大城と⑬葛城をどのように位置付けるかを除けば——、今のところ発見されていないことが確認された。従って、城址の分析

から呉国都城を探る試みは、現状においては断念せざるを得ない。しかし、先にみてきた所在地・年代・規模の考察内容は、全くの無駄であったかといえそうではない。既発見城址を呉都に比定するいくつかの説が成り立ち難いことは明らかになったであろうし、城址全体に一定の傾向性が看取されたこともまた、意味のないことではない。以下においては、この傾向性について、もう少しふみこんで検討してみたいと思う。

まず、所在地についてふりかえてみると、呉国城址の分布には一定の偏りがみられた。さらに、年代ごとにも築城地域に偏りがあり、年代と分布の間には関連性があると考えられる。これをふまえて地域を区分し、城址の規模も加えてまとめると、左の表〔城址の偏在性〕のようになる。

城址の分布地域は、太湖を中心として、i 北部（寧鎮地域）・ii 西部・iii 東部の三つに分けられる。築城年代は、

【城址の偏在性】

No.	地域区分	行政区分	築城年代	規模
i	寧鎮地域（太湖北部）	丹陽市 常州市武進区・無錫市濱湖區	西周中期 闔廬Ⅰ期	B C E
ii	太湖西部	南京市高淳縣・溧陽市	春秋中晚期	C D E
iii	太湖東部	蘇州市・昆山市	闔廬Ⅱ期	A C D

※夫差期の⑧呉城・⑫郢城を除く。

※丹陽市の⑬葛城については、外城規模不明。



iでは二期に分かれるが、ii・iiiはそれぞれ一期に当てはまる。ひとつの年代中に複数の地域で築城が行われることはなく、一代代において一地域という偏りがあることは明らかである。

では、このような分布と年代の偏りは、いったい何を意味しているのだろうか。筆者は先に、呉・越の境域と文化圏の関係性について考察したが、その際に論じた墓葬の分布状況は、城址の偏在性とも密接に関係しているように思われる。呉越地域独特の墓葬である土墩墓と石室土墩墓の分布を上記区分にあてはめると、

i 土墩墓（呉王墓・貴族墓を含む）

ii 土墩墓

iii 石室土墩墓

となる。<sup>③</sup>また、青銅器の出土状況は、

i 西周系・春秋系両方の青銅器

ii 春秋系青銅器

iii 西周系青銅器

と分かれる。<sup>④</sup>墓葬・青銅器の地域区分は、城址の偏在性から求められる地域区分と完全に一致するというわけではないが、およそその範囲で重なり合っている。これをふまえて考えてみるならば、それぞれの地域は次のように性格付けられるであろう。

iは、呉王墓・貴族墓とみられる大型の土墩墓を擁し、西周系・春秋系両方の青銅器を出土している。また、最早年代の<sup>⑤</sup>葛城が呉都の可能性を示唆されているほか、闔廬の蘇州遷都以前と推定し得る城址群が集中している地域である。列国都城クラスの規模「A」の城址はみつからないが、それに次ぐ「B」の城址が発見されているのは、——<sup>⑥</sup>邗城が揚州市にあることを除けば——当地域のみである。すなわち、iは呉国支配者層に関わる文化堆積が最も厚く、西周・春秋両時代において継続的に呉国の中心地域であったと推測される。

iiの年代は春秋中晩期で、iの西周中期と闔廬I期の間の期間に当たる。前述の通り、この地域最大の城址である<sup>⑦</sup>固城を、諸樊から餘昧にかけての呉都とみなす説もあるが、<sup>⑧</sup>固城の規模は「C」である。また、iにみられるような王墓・貴族墓はみつからない。従って、iiを呉の中心地域と考えることはできない。出土青銅器は春秋系青銅器であるが、前述したように、この地域は春秋中晩期において呉・楚の係争地であったため、先進的な楚からの影響を受けやすく、そうした事情が青銅器の様式にも反映されている。<sup>⑨</sup>

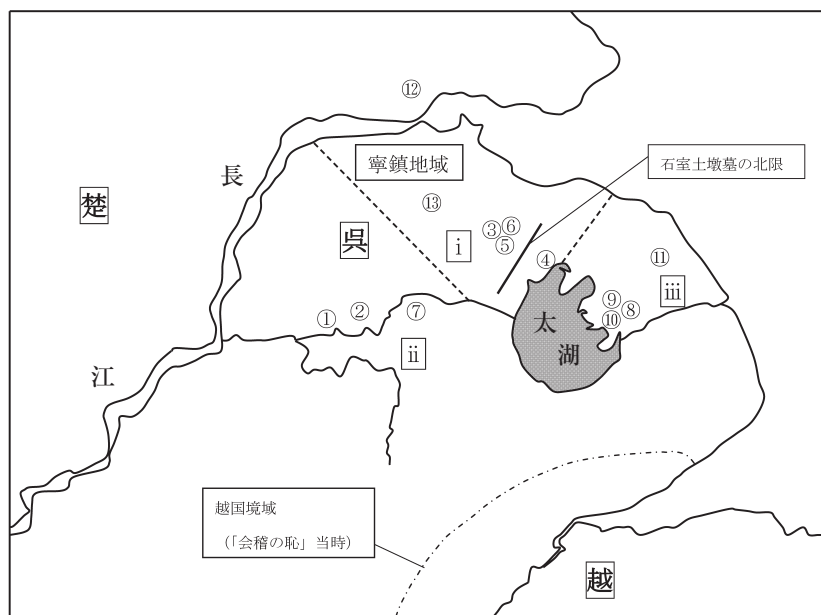
iiiの石室土墩墓は越文化のものであると考えられており、この地域は元来、呉の境域ではなかった。しかし、越

族居住区ではあるものの、越国の支配が確立していたわけでもなく、帰属が曖昧な地域であったと推測される。闔廬の蘇州遷都以後、呉の支配権が確立し、「A」に属する大規模都城が築城されることになる。<sup>36</sup>つまりiiiは、呉の最終段階における中心地域で、比較的后進的な青銅器の出土も、そうした事情を反映しているものと思われる（【地図2】参照）。

以上のように、呉国城址の分布は年代によって偏りがあり、さらに、その偏りに基づいて区分された各地域は、墓葬や青銅器にみられる呉文化の地域区分とも、おおよそではあるが一致すると考えられる。上述の如く、呉国支配者層に関わる文化堆積の厚さとその内容は、iとii・iiiの間で明らかに異なるのであり、闔廬の蘇州遷都に至るまで、呉の中心地は一貫してiの寧鎮―太湖北部にあったと考えられる。呉世家正義や『世本』居篇には数次にわたる遷都が記されているが、今、仮にこれを信じたとして、最後の蘇州への遷都以外は、i地域内で行われたということになるであろう。

## 結語

本稿では、遷都問題という視点から、呉国城址の所在地・



【地図2】

年代・規模について整理してきたが、その結果、従来の研究においては、城址の規模に対する検討が不十分なままに都城を比定していたことが明らかになった。城址の規模には顕著な差が認められ、〔A〕〔E〕の五つの規模に分類できたが、これまでに呉都と推定されてきた城址は、そのうち〔A〕〔C〕の三段階に分散している。列国の都城と比較するならば、〔A〕以外の城址は相当に小さく、確固とした証拠がない限り、これを都城とみなすことはできない。そして、現状においては、そうした証拠を有する城址は発見されていないのである。

もうひとつ、従来の研究の問題点を指摘するならば、文献史料の編纂年代や内容の信憑性に関する検討が不足していることが挙げられる。特に、はるか後代の編纂である地方志に記載された、出所の不確かな伝説をほとんどそのまま信用して、城址の年代比定や性格付けの根拠としている点は、大きな問題である。序に述べたように資料は少なく、地方志に残る伝説も貴重ではあるが、それは第一に、後代における伝説形成の事情や、その背景にある地域社会について考察するための材料とすべきものであって、古代歴史地理研究においては最重要の根拠とすべきものではない。従って、本稿では、それを『左伝』の記載と照らし合わせ、可能な限り春秋当時の状況に沿った答えを導き出そうと試

みた。仮に地方志の記載内容に従う場合があるとしても、一旦は古代文献との対照を経て、その信憑性を問う必要があることは、あらためて指摘しておきたい。

以上の如く、研究方法の問題点を解消したうえで、最後に、遷都の始点である最初期の呉都がどこにあったかという当初の課題にもどってみよう。本稿の考察では、城址の分布と年代には偏りがあることが看取されたが、その偏在性に基づく地域区分は、墓葬や青銅器などの地域区分とおおよそ重なり合っていると考えられる。i 寧鎮地域・太湖北部・ii 太湖西部・iii 太湖東部の三地域のうち、i 地域には西周中期と闔廬I期の城址が存在しているが、王墓・貴族墓がみつかったのもこの地域であるうえ、西周系・春秋系両方の青銅器も豊富である。こうした城址の分布と年代、文化堆積の厚さからすれば、闔廬による蘇州遷都以前の呉国の中心地は、一貫してi地域にあったと考えるのが妥当ではないだろうか。つまり、蘇州遷都以前の呉都が経験した数次の遷都は、全てこの地域内におけるものであると想定されるのである。

# 注

(1) 拙稿「呉国歴史地理研究序説——遷都問題に関する研

究史の考察——」〔『歴史』第一二輯、二〇〇九年四月〕。

- (2) 陳槃『春秋大事表列國爵制及存滅表誤異』(中央研究院歷史語言研究所專刊五十二、中央研究院歷史語言研究所、一九六九年)。吳奈夫『先秦時代吳國都城的盛衰与變遷』(『蘇州大學學報(哲學社會科學版)』一九八五年第四期)。

- (3) 徐中舒『殷周之際史迹之檢討』(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第七本第二分冊、一九三六年)。顧頡剛『周人的崛起及其克商』(『文史雜誌』一卷三期、一九四一年)。同『奄和蒲姑的南遷——周公東征史事考証四之四』(『文史』第三十一輯、一九八八年(遺著論文))。童書業『積』攻吳』与『禹邗』(『童書業歷史地理論集』中華書局、二〇〇四年/初出は『中國古代地理考證論文集』中華書局上海編輯所、一九六二年)。林志方『宜國滅奄國都淹城考』(『東方文明之韻——吳文化國際學術研討會論文集』嶺南美術出版社、二〇〇〇年)。

- (4) 唐蘭『宜侯矢簋考釈』(『考古學報』一九五六年第二期)。蕭夢龍『初論吳文化』(『江蘇社會科學』一九八〇年第一期)。同『淹城吳都考』(『東南文化』一九九六年第二期)。李學勤『宜侯矢簋与吳國』(『文物』一九八五年第七期)。董楚平『吳越文化新探』(浙江人民出版社、一九八八年)。張敏『吳王餘昧墓的發現及其意義』(『東南文化』一九八八年第三/四期)。同『丹徒考』(『東方文明之韻——吳文化國際學術研討會論文集』(嶺南美術出版社、二〇〇〇年)。任偉『關於『太伯奔吳』及相關問題』(『西周封國考疑』東方歷史學術文庫、社會科學文獻出版社、二〇〇四年)。

- (5) 王暉『西周春秋吳都遷徙考』(『歷史研究』二〇〇〇年第五期)。

- (6) 孟穎・張敏『長江下游的徐舒与吳越』(長江文化研究文庫、湖北教育出版社、二〇〇五年)。

- (7) 國家文物局主編、中國地圖出版社、二〇〇八年。

- (8) 南京博物院・鎮江博物館・丹陽市文化局『江蘇丹陽葛城遺址考古勘探与發掘簡報』(『東南文化』二〇一〇年第五期)。

- (9) 『江蘇分冊』は、『左伝』哀公九(前四八六)年の「秋、吳城邗、溝通江淮。」を引いて、広陵城を夫差による築城とし、その年代を春秋・唐としている。本文中にも記したように、広陵城の最下層の文化堆積は春秋時代のものである。しかし、文化堆積の年代と城壁の始建年代とは、必ずしも同じであるわけではない。『江蘇考古五十年』(南京出版社、二〇〇〇年)によれば、前四七三年に越が呉を滅ぼしたことによって⑫邗城は越に属し、その後、楚の威王が越王無彊を伐つてこれを版図に加え、前三二九年に至り、邗城の基礎上に増築して広陵城と名付けたのだという。すると、広陵城は戦国楚以降の城址で、呉国の城址からは除外されることになる。本稿ではこれに従い、⑫邗城は呉から越にかけての城址、広陵城は戦国楚以降の城址と考えることとする。

- (10) 『江蘇分冊』の見解は、以下の諸論文に基づいていると思われる。錢公麟『春秋時代吳大城位置新考』(『東南文化』一九八九第四/五期)。同『論蘇州城最早建于漢代』(『東南文化』一九九〇年第四期)。錢公麟・陳軍『吳大城与列

国都城之比較」（『東南文化』一九九一年第六期）。陸雪梅・錢公麟「春秋時代吳大城位置再考——靈岩古城与蘇州城」（『東南文化』二〇〇六年第五期）。

(11) 注(8) 前掲発掘簡報。

(12) 張敏氏の説については、注(4) 前掲「吳王餘昧墓の発現及其意義」、及び注(6) 前掲書参照。遷都経路については、江村治樹「二〇〇七年、長江下游吳越文化調査旅行日誌——南京・鎮江・揚州・常州・無錫・蘇州・上海——」（『アジア流域文化論研究』Ⅳ、東北学院大学オーブン・リサーチ・センター、アジア流域文化論研究プロジェクト、二〇〇八年）のインタビューによる。

(13) 吳世家正義には、「吳、國號也。太伯居梅里、在常州無錫縣東南六十里。至十九世孫壽夢居之、號句吳。壽夢卒、諸樊南徙吳。至二十一代孫光、使子胥築闔閭城都之、今蘇州也。」とあり、『世本』居篇には、「吳孰哉居藩籬、孰姑徙句吳、諸樊徙吳。（注）宋忠曰、孰哉、仲雍字。藩籬、今吳之餘暨也。孰姑、壽夢也。句吳、太伯始所居地名。」とある。

(14) 注(1) 前掲拙稿参照。本文中の『左伝』・『滕公廟記』は、注(4) 前掲論文の引用によるものであり、注(6) 前掲書においてはより詳しく引用・考察がなされているが、これらの間には、史料解釈においていくぶんか差異があるように思われる。注(1) 拙稿における張氏への批判は、注(4) 論文に対するものであったため、注(6) 著書を対象とした場合には不適切な批判となる部分もあるが、固城

呉都説に対する批判として、大筋においては前稿を覆す必要はないと考える。

(15) 注(6) 前掲書。

(16) 『左伝』昭公四年には、「秋七月、楚子以諸侯伐吳、宋太子・鄭伯先歸、宋華費遂、鄭大夫從。使屈申圍朱方、八月甲申、克之、執齊慶封而盡滅其族。……遂以諸侯滅賴。賴子面縛衡壁、士袒、輿櫬從之、造於中軍。……遷賴於鄆。」とあり、「賴」は吳の邑ではなく国であることが明らかである。従って、「賴」を「瀨」の誤りとすることはできない。

(17) 楊伯峻『春秋左伝注』（中華書局、一九八一年）に拠る。

(18) 濮陽康京「江蘇高淳固城遺址の現状与時代初探」（『東南文化』二〇〇一年第七期）によれば、春秋時代の固城は湖と河川の交接する角にあり、西方の楚を防ぐ水路の咽喉地で、軍事・交通運輸の面で極めて有利であったが、地勢が低くて水害に遇いやすいという難点があったという。

(19) 趙玉泉「武进県淹城遺址出土春秋文物」（『東南文化』一九八九年第四／五期）、及び注(4) 前掲の蕭夢龍「淹城吳都考」では、出土青銅器の特徴などから、③淹城の年代を春秋晚期とみなし、近接する⑤胥城・⑥留城もこれと同年代の城址であるとする。林志方「淹城遺址探源」（『東方文明之韻——吳文化国際學術研討會論文集』（嶺南美術出版社、二〇〇〇年）、及び同氏の注(3) 前掲論文では、始建を西周早期とし、春秋晚期（紀元前五三八年前後）に最後の大規模修築が行われたとしている。

(20) 注(3) 前掲の顧頡剛「奄和蒲姑の南遷——周公東征

- 史事考証四之四」、及び注(19)前掲林志方論文等においては、周公旦の東征によって滅ばされた奄の余裔が南下して逃れ、淹城を築いてここに居住したと考えている。『越絶書』外伝記呉地伝には、「毗陵県南城、故古奄君地也。」とある。また、呉国城址としてであつても、都城説のほかに、季札の邑・軍事施設・祭祀施設とする説など、その築城目的については様々な説があり、築城者も未確定である。
- (21) 彭適凡・李本明「三城三河相套而成的古城典型——江蘇武進春秋淹城个案探析」(『考古与文物』二〇〇五年第二期) 参照。

- (22) 葉文憲「呉国歴史与呉文化探秘」(文物出版社、二〇〇七年) 参照。

- (23) 『呉地記』が書かれた唐代の「四十二里三十歩」は、今の約二三五五八mである。この周長は、一覽表⑨蘇州故城の外城規模から推測される周長と比べてもはるかに大きい。しかし、『越絶書』外伝記呉地伝に、「閶門外郭中冢者、闔廬冰室也。」とあることから、『越絶書』が書かれた後漢時代には、閶門の外側に「郭」が存在したことが知られる。『呉地記』の記す「大城」がこの外郭を指すのであれば、「四十二里三十歩」という周長と合致する可能性がある。一方、④閶城の外城規模は⑨蘇州故城の半分にも及ばず、外郭の存在も推定し得ない。

- (24) 張敏「閶閭城遺址の考古調査与初步認識」(南京博物院: [http://www.njmuseum.com/html/News\\_content@NewsID@1425b425-177b-478e-bd3a-74b11991512.html](http://www.njmuseum.com/html/News_content@NewsID@1425b425-177b-478e-bd3a-74b11991512.html)) 二〇〇八年

十二月二十六日)。

- (25) 「蘇州古代史(二)——城郭構造——」(『東北学院大学論集 歴史学・地理学』第二十五号、一九九三年二月)。

- (26) 越城は、蘇州市虎丘区横塘街道石湖北越來溪東に位置し、東西四〇〇m×南北四五〇m・面積十八万㎡ほどの規模の城址である。『江蘇分冊』は、越王句踐が三年という長期に渡つて呉を包囲し、呉を滅ぼした戦争中に築かれた屯兵の城邑に関係するという。また、呉国の一つの集落で、呉越戦争に起因して、四周に城壁を築いたのであり、呉都以南の軍事防衛システムである、とする説もあるという。

- (27) 佐原康夫「春秋戦国時代の城郭について」(『古史春秋』第三号、一九八六年八月)では、城郭の規模が城壁の最長辺の二乗を超えることがないことを根拠とし、各城址の最長の城壁を指標として規模を比較している。この方法は、城址の比較検討を行う際に参考になると思われるが、呉国城址の場合には、城壁の最長辺がわからないものも多いため、現存城壁の東西×南北の距離を基本とし、その他データも参考として比較することとした。

- (28) 注(27)前掲論文によれば、春秋列国の都城は、城壁の最長辺が二五〇〇m以上に達する。

- (29) 鄆城の規模については、楚皇城考古発掘隊「湖北宜城楚皇城勘查簡報」(『考古』一九八〇年第二期) 参照。

- (30) 注(18)前掲論文参照。

- (31) 林志方『淹城探謎』(黑竜江人民出版社、二〇〇七年) 参照。



(32) 拙稿「呉越戦争と越文化圏」〔『集刊東洋学』第一〇六号、二〇一一年十月〕。

(33) 楊楠『江南土墩遺存研究』（民族出版社、一九九八年）、葉文憲「呉人土墩墓与越人石室土墩墓」（『東方文明之韻——呉文化国際學術研討会論文集』（嶺南美術出版社、二〇〇〇年）、及び注（32）前掲拙稿等を参照。

(34) 岡村秀典「呉越以前の青銅器」（『古史春秋』第三号、一九八六年八月）参照。

(35) 注（34）岡村論文参照。

(36) 注（33）前掲葉文憲論文、及び注（32）前掲拙稿参照。  
ただし、蘇州市澁墅関鎮で発見された真山大墓について、これを呉王寿夢墓であるとする説と越国貴族墓とする説があることには注意を要する。もしこの墓が寿夢墓であるとするならば、闔廬遷都以前にあつてiii地域の境域化が進行していた可能性があり、遷都経路の考察においても重大な問題となる。

(37) 注（13）参照。